

前期青銅器時代 I-III 期パレスティナ地域における セトルメント・パターンの変遷と地域性

山藤 正敏

Changes in Settlement Patterns and Regional Diversity in Palestine during the Early Bronze Age I-III

Masatoshi YAMAFUJI

前期青銅器時代 (EB) I 期から II-III 期にかけて、パレスティナ地域においては「都市化」が進行し、各地に城壁を有する大型「都市」が出現することが確認されている。加えて、この時期における遺跡のセトルメント・パターンにも顕著な変化が認められてきた。しかしながら、従来のセトルメント・パターン研究では、イスラエル領内を専らの対象としており、また、地域細分が適切な形で行われなかったため、詳細な把握が行われえない状況にあった。

本稿では、イスラエルとその周辺地域をも含んだ地域を対象とし、地理的・環境的特徴に基づいた地域細分を行った上で、全体的で詳細な分析を行った。その結果、EB I 期から EB II-III 期のパレスティナ地域におけるセトルメント・パターンの変化に地域差が認められることが明らかになった。この地域差は、各地域をとりまく状況差を反映していると考えられ、パレスティナ地域における「都市化」過程が決して一様に進行したわけではなかったということを示唆している。

キーワード：パレスティナ前期青銅器時代、セトルメント・パターン、「都市化」、地域的多様性、多層構造

A process of “urbanization” had proceeded the transition from the EB I to EB II-III periods in Palestine. This phenomenon has been recognized from newly established fortified large “cities” and the communal structures represented by temples, palaces and other features. In addition, some remarkable changes in settlement patterns have also been recognized during these periods. Particularities recognizable in the settlement patterns, however, are not adequately understood since the present territory of Israel has been the exclusive region subjected to this type of study. Furthermore, the area regarding past studies of settlement patterns has not been properly subdivided. In this paper, a detailed analysis is carried out, after an adequately subdividing Israel and vicinity based on geographical and ecological characteristics of this region. As a result, it was possible to recognize clear regional diversity in settlement patterns during the transition from the EB I to EB II-III periods. Thus, it seems that regional diversity reflects differences in the conditions of each region, and it is suggested that the process of “urbanization” in Palestine never proceeded uniformly throughout the whole region.

Key-words: Early Bronze Age in Palestine, settlement patterns, “Urbanization”, regional diversity, palimpsest

はじめに

前期青銅器時代 (以下 EB と略記)、とりわけ EB I 期 (前 3650 ~ 3100 年) から EB II-III 期 (EB II 期 = 前 3100 ~ 2700 年、EB III 期 = 前 2700 ~ 2300 年)¹⁾ にかけてのパレスティナ地域においては、城壁や公共建造物の出現により示されるように、「都市化」(Urbanization) と呼称される文化的・社会的変化が顕著に認められる (Richard 1987: 27; Mazar 1990: 108; Ben-Tor 1992: 85)。この「都市化」過程の把握のため、土器をはじめとする遺物や遺構の研究

がなされてきたわけである。同様の目的から、異なるアプローチ方法としてセトルメント・パターン論が数多く展開されてきた。これらが論じられる背景には、1960 年代から現在に至るまで、今日のイスラエル、パレスティナ、ヨルダンにおいて徹底的に行われてきた分布調査の膨大な成果が存在する。なお、現在でも分布調査は続けられており、毎年新たな成果が付け加えられている。

こうした成果を総合して論じる試みは全時期について多数行われているが、前期青銅器時代を対象とした論考は

1980年代前半から1990年代前半にかけて盛んに刊行された。これらの研究は、当該期におけるセトルメント・パターンの変遷を統計的に処理し、認識しやすい形で提示したため、「都市化」過程に関する研究に大きく寄与した。

その一方で、これらの論考は2つの大きな問題をも含んでいる。1つめは、現在のイスラエル領内の遺跡分布状況のみに焦点を絞っているということである。ヨルダン川を挟んだ東側においても各国調査隊による綿密な分布調査が行われており、また、ここで発見される前期青銅器時代の物質文化は、イスラエル領内において認められるものとはほぼ同質と判断されるにもかかわらず、である。このヨルダン川及び死海の東岸に広がる前期青銅器時代の遺跡分布は、パレスティナ地域全域におけるセトルメント・パターン論を展開する際に決して欠かせないものであることは言うまでもない。さらに、2つめの問題として、いずれの論考においても、パレスティナ地域の細分が妥当な形で行われていないという事実を挙げることができる。しかしながら、パレスティナ地域の細分化は、数多くの遺跡が確認されている前期青銅器時代を綿密に分析する上で非常に重要である。

以上の2つの問題点を踏まえて、本稿では、古植生・降水量などの環境的特徴及び地理的特徴を考慮したパレスティナ地域の細分を新たにを行い、各細分地域における遺跡の分布状況を通時的に比較・検討する。これら一連の作業により、EB I期からEB II-III期にかけての各地域での遺跡分布状況が明らかとなり、当該期に生じたと考えられる文化的・社会的変動（「都市化」）の一端を新たに把握することが可能となる。

研究史—パレスティナ地域におけるセトルメント・パターン論の展開

セトルメント・パターンが盛んに論じられる背景には、当然のことながら遺跡情報の蓄積がある。以下では、特に分布調査が徹底して行われてきたイスラエルに焦点を絞って、これまでの研究の進展について記述していく。

パレスティナ地域においては、19世紀末から1950年代まで欧米の研究者たちにより散発的な発掘及び分布調査が行われてきた歴史がある。その後1960年代から1970年代にかけて、とりわけイスラエル領内の各地域に関して、本格的で綿密な分布調査とその成果の刊行が顕著になり始める（Kochavi 1972; Bar-Adon 1972; Kallai 1972; Gophna and Porat 1972; Epstein and Gutman 1972）。

1970年代後半には、1964年に設立されたイスラエル考古学的分布調査協会（The Society for Archaeological Surveys in Israel）の名の下に、分布調査の報告書が刊行されるようになる（Israel Antiquities Authority 2007）。

このシリーズの刊行は、後身のイスラエル考古局（The Israel Antiquities Authority）に引き継がれ、現在に至っている。この報告書は、イスラエル国土上に設定された10km四方のグリッド1つに対して1冊が刊行されており、各グリッドにおける実地調査は大学及び諸研究機関の複数の研究者によりそれぞれ行われている²⁾。

上記のような分布調査の進展と遺跡データの蓄積に伴い、本稿の対象時期である前期青銅器時代におけるセトルメント・パターンが論じられ始めるのは1980年代になってからのことである。今日までのセトルメント・パターン論の発展を、4段階に区分して以下に示す。

第1段階においては、EB II-III期が対象とされ、イスラエル領内全域を包含する全域論的セトルメント・パターン論が展開されるが、人口論の比重がかなり大きいのが特徴である。M. ブロシ（Broshi）とR. ゴフナ（Gophna）は、地理的根拠に基づいた10地域細分をイスラエルのみに適用した上で、各細分地域における遺跡数、占有面積、及び密度を比較し、先行研究から導き出した1haあたりの人口推定に基づいて、各細分地域における人口論に踏み込んでいる（Broshi and Gophna 1984）。この論考では、分布図を利用したセトルメント・パターン論が展開されることはなく、統計処理による各地域間の差異が示されたにとどまっている。また、他に遺跡立地に着目した研究も存在する（Gophna 1984）。

第2段階では、銅石器時代からEB II-III期までを研究対象として含み、地域論的な視点から、統計的手法を用いた本格的なセトルメント・パターン論が展開された。また、人口論の展開も依然として認められる。ゴフナとJ. ポルトゥガリ（Portugali）は海岸平野（Coastal Plain）の分析を行い、EB IA期からEB II期にかけて遺跡分布の集中が南部に移動する傾向を指摘した（Gophna and Portugali 1988）。また、I. フィンケルシュタイン（Finkelstein）とゴフナは、中央高地（Central Highland、今日のパレスティナ西岸地区に位置）を対象として遺跡の数・継続率や面積を統計的に比較した上で、EB I期における遺跡分布は北部に偏向していたが、EB II-III期にはいり南部において新たな居住地が形成されたことにより、分布状況が均一化する傾向を指摘している（Finkelstein and Gophna 1993）。さらに、彼らは、居住が継続し遺跡分布が密な中央高地北部を定住的とし、居住が継続せず遺跡分布の僅少な中央高地南部を遊牧的と捉えたことにより、EB期における地域性を明白にしている（Finkelstein and Gophna 1993: 8）。

第3段階では、EB I期からEB II-III期を分析対象に包含した、イスラエル全域を対象とする全域論的セトルメント・パターン論が展開された。この段階のセトルメント・パターン論では、「都市化」過程における社会変動への言

及が顕著に認められる (Portugali and Gophna 1993; Joffe 1993; Gophna 1995)。EB IB 期から EB II 期にかけてのセトルメント・パターンの変化から「社会的・空間的危機」(Socio-Spatial Crisis) を見出し、EB II 期における「都市化」直前期の変動を捉える見解 (Portugali and Gophna 1993; Gophna 1995) や、パレスティナ地域各地における地域の変化をより考慮した論考 (Joffe 1993; Falconer and Savage 1995: 48-55) など、「都市化」過程に関する新しい研究を挙げることができる。

第 4 段階においては、従来のように全域論的セトルメント・パターン論が活発に論じられるということはない。R. フランケル (Frankel) らによる上ガリラヤ (Upper Galilee) の分布調査の報告におけるセトルメント・パターンの検討 (Frankel et al. 2001)、また、R. グリーンベルク (Greenberg) によるフレイ渓谷 (Hulah Valley) における分布・発掘調査とその分析 (Greenberg 2002) 等、今日のセトルメント・パターン論は、分布調査に付随した形で、地域論的に論じられる傾向が強くなっている。なお、近年の傾向においては例外的に、N. ゲツトヴ (Geztov) らにより、イスラエル全域における周壁を有する遺跡の分布が論じられたことを付言しておく (Geztov et al. 2001)。

以上にまとめたように、今日においては、特に近年蓄積された綿密なデータが利用可能な状況であるため、特定の属性を有する遺跡だけを対象とするのではなく、網羅できる限りの当該期の全遺跡を対象とする全域論的分布論が展開される必要がある。これにより、遺跡分布の研究はより精密になっていくはずである。

地域細分と分析方法

1. 対象地域と地域細分について

本稿が対象とする地域は、現在のイスラエル (ネゲヴ沙漠を除く)、パレスティナ、ヨルダン西部、レバノン南端部、及びゴラン高原を含む地域である。本稿では、この範囲をパレスティナ地域と呼称する。

このパレスティナ地域に対して、新たな地域細分を行う。従来、当該地域の細分が行われてきたが、地理的根拠に基づくとは言うものの (Broshi and Gophna 1984: 42)、部分的に歴史的な区分 (中央高地におけるサマリア (Samaria) やユダ (Judea) という区分) を含み、当該期のパレスティナ地域内における地域性を示すためには、やや不適切な細分方法であったと言わざるを得ない。

そこで、新たな地域細分を行う際には、地理的特徴と環境的特徴のみを細分の根拠としたい。地理的特徴とは、いうまでもなく、等高線や河川流路による地形・水系の把握により得られた知見に従った地域的特徴を指している。ま

た、環境的特徴とは、当該期の古植生及び現在の年平均降水量から導き出される地域的特徴を指している。

後者の環境的特徴を検討する場合には、ツァイストとボッテマによる研究成果が有効である (von Zeist and Bottema 1991)。彼らは、主として花粉分析から、初期完新世における西アジア地域全域の古植生復元を試み、その一環として前 3000 年頃のパレスティナ地域における古植生分布を示した (von Zeist and Bottema 1991: 113-14, Fig. 40) (図 2)。この植生分布図に依れば、当該期パレスティナ地域は 15 種類の植生域に区分されているが、大きく見れば、1) 森林域 (1.2, 1.4, 2.1, 2.23, 4.21)、2) 広葉草本域 (樹木伴う) (13.11a/b, 13.12)、3) 乾性低木・草本域 (8, 9.3, 9.4/11.23,

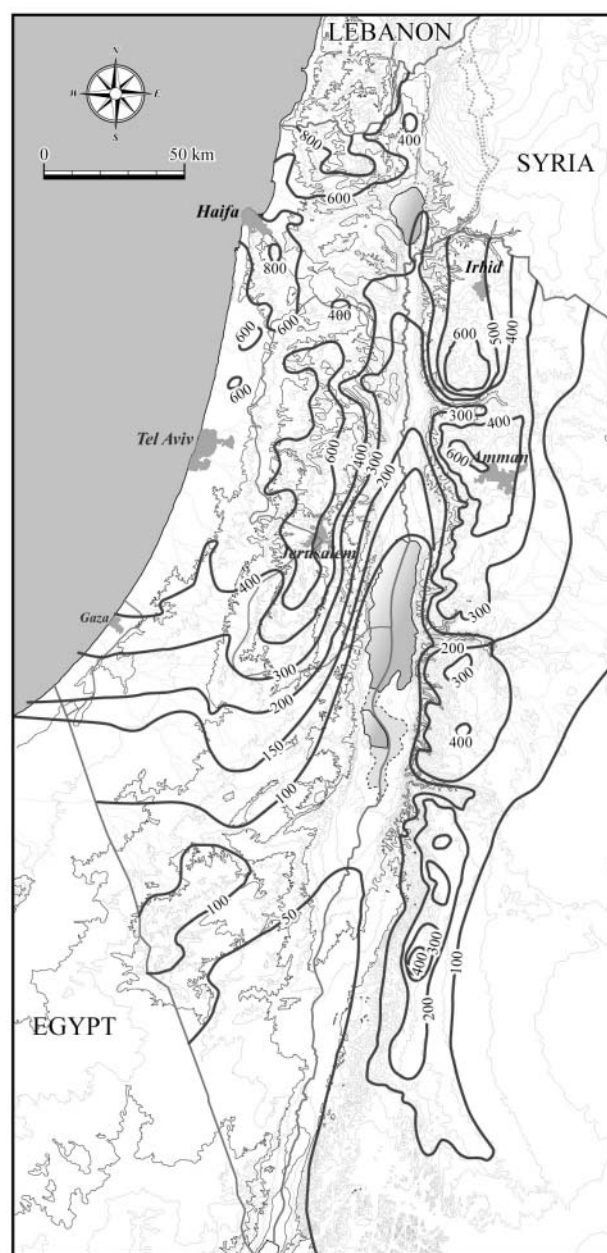


図 1 パレスティナ地域における現在の年平均降水量 (MacDonald 2001: fig.17.1 を基に作成)



図2 前3000年のパレスティナ地域における植生分布
(van Zeist and Bottema 1991: fig. 40 を基に作成)

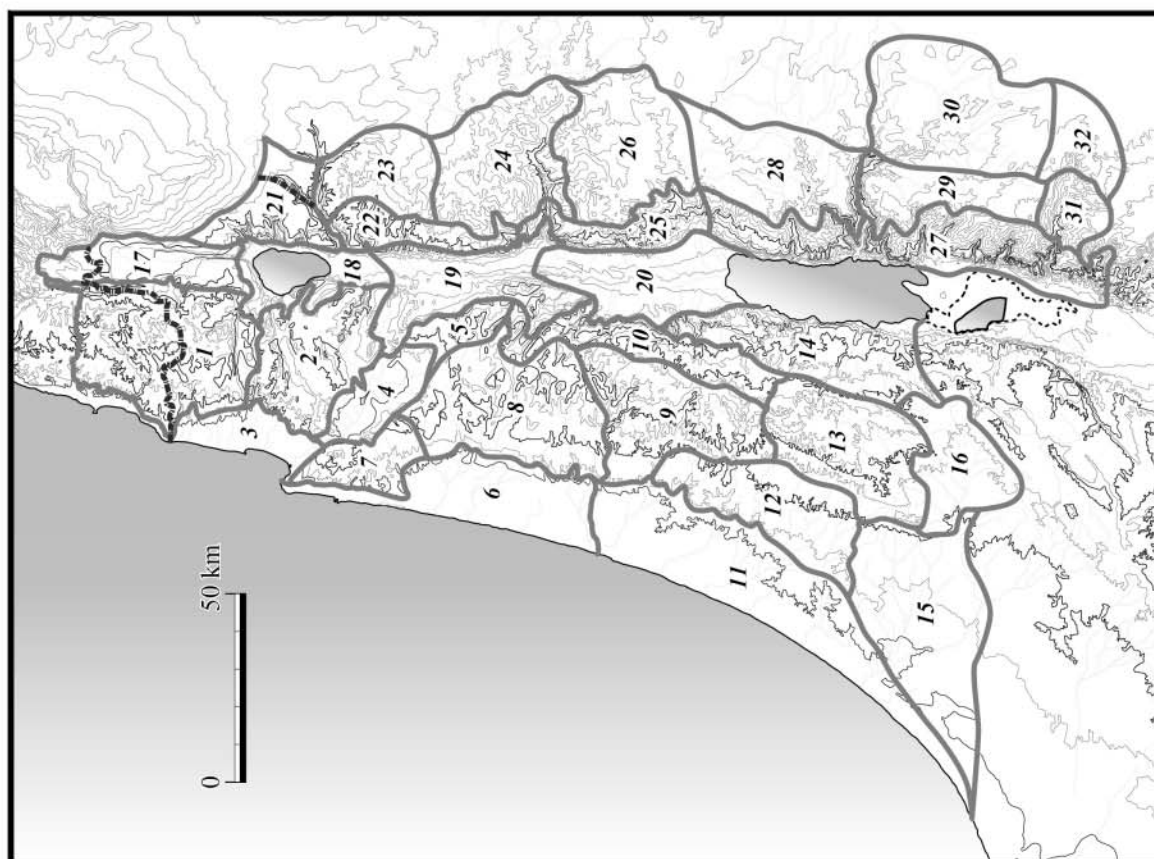


図3 パレスティナ地域の地域細分 (数字は地域番号)

17.1)、4) 湿地域 (12.1, 14)、及び 5) 砂丘・沙漠域 (17.12, 18.31) という 5 植生域に区分可能である³⁾。これらのうち湿地域を除く植生域を、B.マクドナルドによる年平均降水量等高線に従って、300mm 以上の比較的湿潤な樹木生育地 (森林域及び広葉草本域) と年平均降水量が 300mm 未満の地域を含む乾燥した低木・草本生育地 (乾性低木・草本域及び砂丘・沙漠域) という対照的な関係として捉え⁴⁾、細分地域を設定する際にはこの植生境界に特に留意した (図 1)。

以上の根拠に基づいて、パレスティナ地域を 32 地域に細分した (図 3)。これらの細分地域を最小単位として、セトルメント・パターンの分析を行う。

2. 分析の手順

1) 分析対象とデータベースの作成

セトルメント・パターン分析にあたって、分析対象遺跡のデータを収集し、データベースを作成した。データベース作成の際には、先述した諸分布調査の成果報告、雑誌論文に掲載された調査報告・概報、及び分布調査の報告書を利用した。また、対象遺跡からは、同定できた場合に限りて墓地遺跡を除外した⁵⁾。

以上の作業の結果、本稿において設定したパレスティナ地域内において、EB I 期から EB III 期に該当する計 986 遺跡の情報を得ることができた⁶⁾。なお、データベースにおいては、各遺跡に関して、遺跡規模、調査面積、遺跡の地理情報、立地、遺跡の形態、包含時期、層序、海拔標高、及び参照文献を入力した。

2) 分析の方法

分析においては、設定した細分地域を単位として、統計的手法により傾向を把握していく。すなわち、各細分地域における遺跡数の比較を数値的に行う。

また、対象遺跡を、報告・図面等に記載されている当該期における遺跡規模に基づいて、極大型 (9ha 以上)、大型 (4ha 以上 9ha 未満)、小型 (4ha 未満) あるいは規模不明という 3 類型に区分する。

前期青銅器時代におけるセトルメント・パターン

図 4 及び 5 は、上述の手順に従って作成した EB I 期及び EB II-III 期における遺跡分布図である。この遺跡分布図に基づいて、細分地域を単位として分析すると、特定の細分地域における遺跡分布に顕著な特徴が認められる。以下、時期別に分布傾向を把握していく。

1. 時期別の全体的特徴

< EB I 期 >

EB I 期については計 709 遺跡の情報を得ることができた。当該期において、最も遺跡数が多いのは北部・中北部及び北東部に位置する 4 地域 (Nos. 2, 4, 8, 19, 24)、西部

に位置する No. 6 地域、及び南西部の海岸平野に位置する No. 11 地域である。これら 7 地域のうち No. 8 地域を除く全ての地域において、当該期における分布遺跡数が 40 遺跡を超える (図 6)。また、上記の地域には及ばないものの、No. 22 地域や No. 23 地域においても遺跡数が若干多い傾向が認められるため、パレスティナ地域中北部ではヨルダン川の東西にわたって遺跡密度が比較的高い傾向を見出せそうである。なお、海岸平野の No. 6 及び No. 11 地域に関しては、密集と言える分布状況を示していないため、上述した「遺跡分布の中心」地域の一角を成しているとは言えないだろう。さらに、パレスティナ地域南東部においても、大型のワディに沿って遺跡密度が高い地域 (Nos. 30, 31) が局所的に存在しているということも顕著な傾向として看取できる。

上記とは反対に、遺跡数が最も少ない地域は、パレスティナ地域の南西部、北東部、及び東部において認められる。すなわち、南西部では Nos. 14 ~ 16 地域、北東部では No. 21 地域、そして東部では No. 28 地域である。これらの地域のいずれにおいても、10 遺跡未満しか確認されていない。

以上より、EB I 期では主として北部寄りの地域において東西にわたって遺跡が密集していた一方、パレスティナ地域南東部における局所的な遺跡の集中現象を除いて、その周辺部においては遺跡の存在が希薄になっている、という傾向を把握することができた。

< EB II-III 期 >

EB II-III 期については、計 555 遺跡の情報を得ることができた。当該期にはいると、EB I 期に比して大きく状況が変化する地域が複数認められる。

この時期において最も遺跡数が多い地域として、EB I 期と同様に北部地域 (Nos. 1, 2, 17) 及び中北部地域 (Nos. 4, 8, 19)、及び、No. 12 地域を新たに加えることができる。No. 12 地域は南西部に位置しており、この地域における遺跡の増加は EB II-III 期において初めて認められる現象である。

分布遺跡数が最も少ない地域は、EB I 期の場合と同様、南西部地域 (Nos. 14 ~ 16) 及び北東部地域 (Nos. 21) であるが、これに加えて、東部・南東部 (Nos. 25 ~ 27, 32) においても、遺跡数が 10 に満たない状況を看取できる。このうち、No. 31 地域及び No. 32 地域については、EB I 期において局所的に遺跡の多い地域であっただけに、急激な変化が生じたという印象を受けざるを得ない。

総括すると、EB II-III 期における遺跡分布は、北部・中北部に分布の重点が依然として存在しているという点で EB I 期における状況と近似しているが、南西部に新たな遺跡密集地域が出現するという現象が、EB I 期における



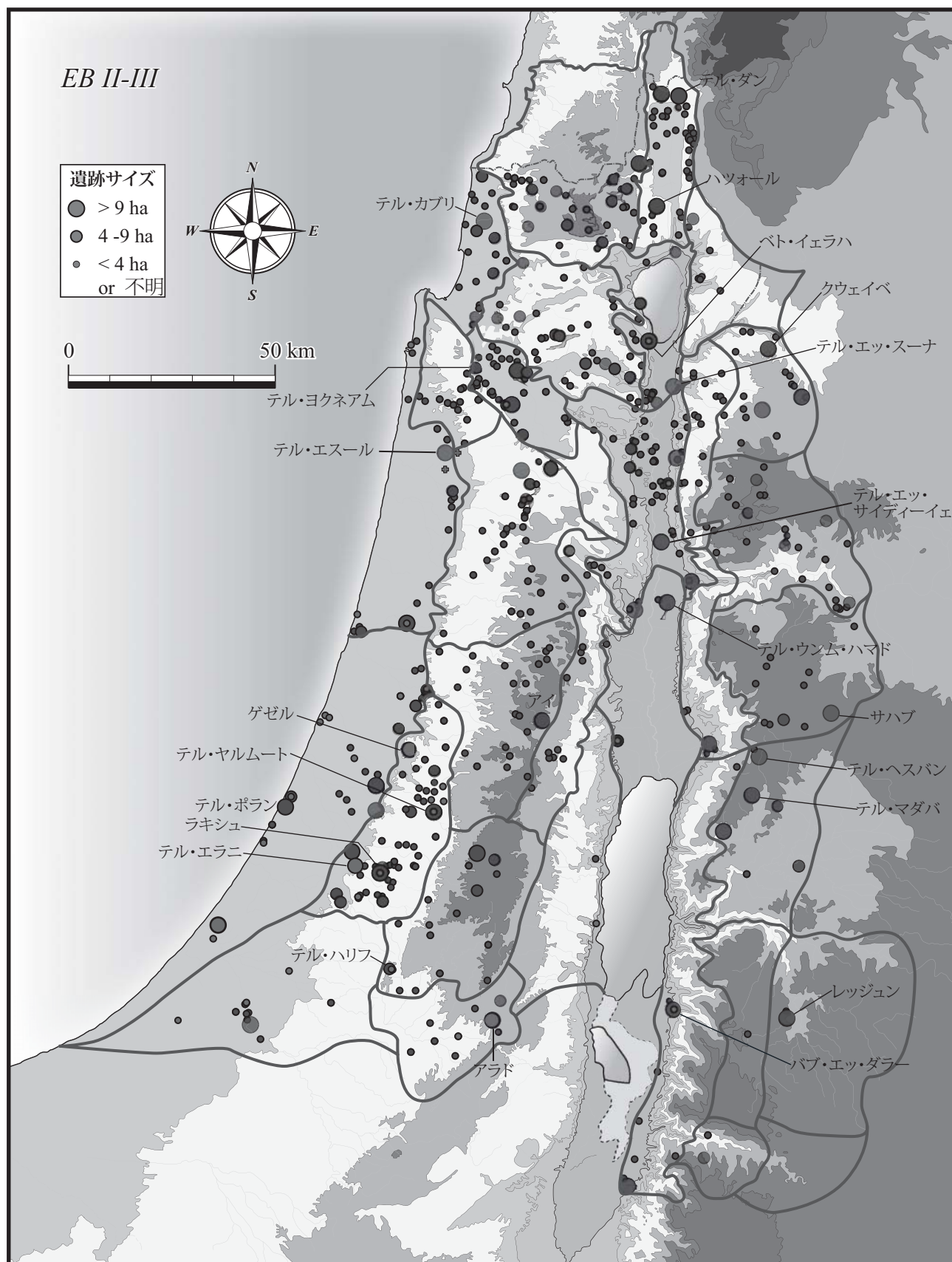


図5 EB II-III 期パレスティナ地域における遺跡分布
 (等高線は標高 500 feet から 1000 feet 単位)

状況との顕著な差異となっている。また、東部の一部地域における遺跡の減少及び南東部における遺跡密集地域の消滅により、パレスティナ地域における遺跡分布の範囲が全体として北西方向に偏る傾向を示しており、EB I期に比して全体の遺跡分布域がやや狭小になったと言えるであろう。

2. EB I期とEB II-III期における分布状況と遺跡継続率

EB I期とEB II-III期では、遺跡分布に顕著な変化が認められるということは先述のとおりである。この変化について、細分地域別に遺跡数の推移を示すと、この傾向をより明瞭かつ詳細に把握できる(図6)。

まず注目すべきは、EB I期からEB II-III期の分布遺跡数に関して、増加する地域、減少する地域、及び同数である地域という3区分が可能ということである。

図5を散見すると、32細分地域中10細分地域において、EB I期からEB II-III期にかけての遺跡数の増加が認められる。この現象を看取できた地域は、北部(Nos. 1, 3, 17, 21)、西部(No. 7)、及び中央部西寄り(No. 9)と南西部(Nos. 12, 13, 15, 16)という3区域に位置している。これらの地域はいずれも、前節においてパレスティナ地域全域について検討した際に比較的遺跡密度が高い傾向を示していたパレスティナ地域中北部の周辺地域に位置している。これらの地域においては、EB I期からEB II-III期の遺跡数が、平均で約43%増加している。区域別に増加率を見ると、北部においては平均約37%の増加を示し、また中央部西寄り及び南西部においても平均約33%の増加率を示している。

一方、EB I期からEB II-III期にかけて遺跡数が減少する地域は、北部(Nos. 2, 18)、中北部(Nos. 4, 19)、西部(海岸平野)(Nos. 6, 11)、中央部(No. 8)、中央部東寄り(No. 10)、東部(ヨルダン川流域)(No. 20)、南西部(死海西岸)(No. 14)、北東部(No. 22-24)、南東部(Nos. 25, 27, 29~32)である。このうち4地域(Nos. 4, 6, 19, 24)に関しては、前項の傾向把握において指摘したとおり、EB I期において最も多くの遺跡が分布していた地域である。これらのうち、中北部及び北東部の「遺跡分布の中心」地域(Nos. 4, 19, 24)においては、EB I期に比して28~36%、平均すれば約32%遺跡数が減少している(図6, 8)。さらに、西部の海岸平野(No. 6)については、約58%の遺跡数の減少が認められるが、同じ海岸平野の南半に位置するNo. 11地域と併せて考えた場合、両地域における遺跡の減少率は平均約50%に達している。

また、EB I期に20以上40未満の遺跡が分布していた地域が複数認められ(Nos. 22, 23, 27, 31, 32)、これらのうちEB I期からEB II-III期にかけて遺跡数の減少が著しい地域が4地域(Nos. 22, 27, 31, 32)も認められた(図6)。

これらの地域は、北東部及び南東部に位置しており、特に南東部においてはEB II-III期に至ってほとんどの遺跡が消滅している。このため、上記4地域におけるEB I期の遺跡数からの平均減少率は76.8%にも達している。北東部における遺跡の減少は、相互の地域が隣接していることから、遺跡分布の密集地である中北部地域における遺跡の減少と関連性があると思われる。しかしながら、南東部において認められる著しい遺跡の減少傾向については、増加傾向と併せて、各地域における個別の説明が必要であろう。

なお、遺跡数が両時期を通して同等である地域は全て、東部(Nos. 26, 28)に位置している。

さて、一通り遺跡数の推移を説明してきたところで、次の検討を加えたい。図7は、細分地域別に遺跡継続率を示したものである。ここで言う遺跡継続率とは、EB I期からEB II-III期にかけて遺跡が継続して利用されていた割合を指す。この数値は、EB I期及びEB II-III期において継続して認められる遺跡数を、EB I期に存在していた全遺跡数で除することで得たものである。

図7から、全体として、EB I期からEB II-III期にかけて継続した遺跡の割合は42.7%という、比較的低い水準を示している。しかし、より詳細に検討すると、上記に示した分布状況の地域差と一定の関係を見出せるのである。

まず、EB II-III期において遺跡数が増加する細分地域における遺跡継続率は、平均60%と全体の平均値より20%近く高い値を示しており、また、No. 7地域とNo. 13地域を除く地域に関して、遺跡継続率が50%以上であるということを見取できる。すなわち、EB I期に利用されていた遺跡の半分以上がEB II-III期に至ってもなお居住されて続けていたということである。そして、遺跡の増加現象は、EB I期に利用されていた遺跡に加えて、さらに新しい遺跡の利用が始まったことを示している。

一方、EB II-III期において遺跡数が減少する細分地域における遺跡継続率は、平均33.2%という低い数値を示しており、No. 23地域を除いて、常に50%未満にとどまっている。遺跡数の減少率が特に著しい東部・南東部(Nos. 27, 29~32)における遺跡継続率の低さが平均値を引き下げていると考えられるが、これらの地域を除いた場合の平均値もまた42.5%と、遺跡増加地域に比べてかなり低い数値を示す。このため、上の数値は、遺跡減少地域において、EB I期に利用されていた遺跡の多くがEB II-III期に至って放棄され、新しい遺跡が限定的にのみ利用されたゆえに全体の遺跡数が減少した蓋然性が高いことを示している。

3. 大型遺跡の分布状況と遺跡継続率

図9は、時期別・細分地域別に大型遺跡数を示したものである。なお、本稿で言う大型遺跡とは、図4及び5の凡例に示しているとおり、全体の規模が4ha以上の遺跡を指

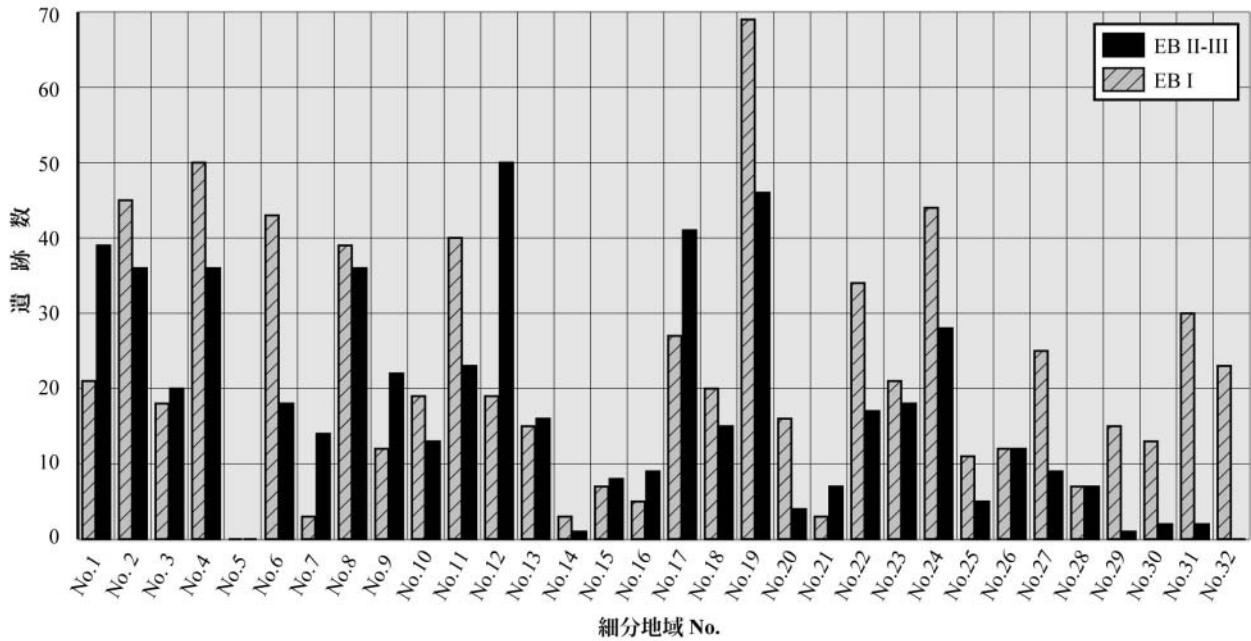


図6 EB I 期及び EB II-III 期における細分地域別遺跡数

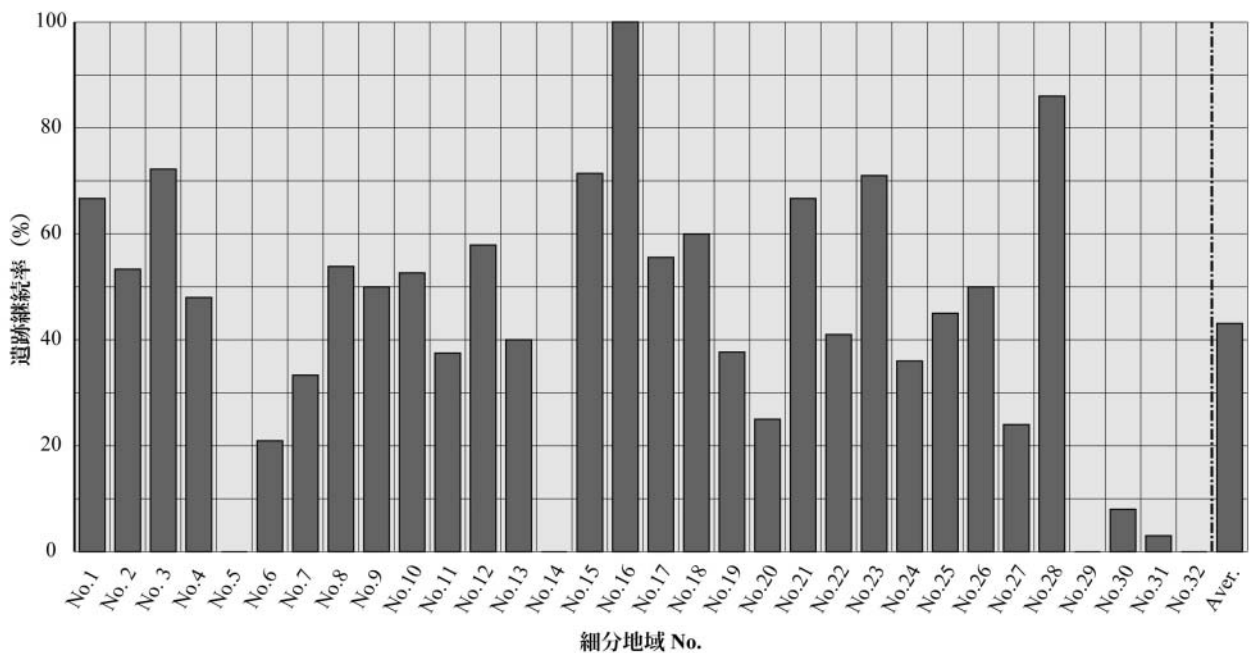


図7 EB I 期及び EB II-III 期における細分地域別遺跡継続率

している。図9を見ると、EB I 期から EB II-III 期にかけて顕著な増減を示す地域が認められる。

まず、EB I 期から EB II-III 期にかけて大型遺跡数が増加する地域は、北部 (Nos. 1, 2, 17, 18)、北東部 (No. 21)、中北部 (Nos. 4, 19)、及び南西部 (Nos. 11, 12, 13) に位置していることがわかる。特に興味深い現象は、中北部 (Nos. 4, 19) において大型遺跡が増加しているということ

である。これらの地域では、EB II-III 期において全遺跡数が著しく減少したことは先述のとおりである (図6)。また上記地域のうち、No. 2 地域、No. 18 地域、及び No. 11 地域においても全遺跡数が減少している。一方、北部・北東部 (Nos. 1, 17, 21) 及び南西部 (No. 12) では EB II-III 期に全遺跡数が増加しており、いずれの地域においても遺跡数の増加率が高い。上記4地域の遺跡増加率は平均

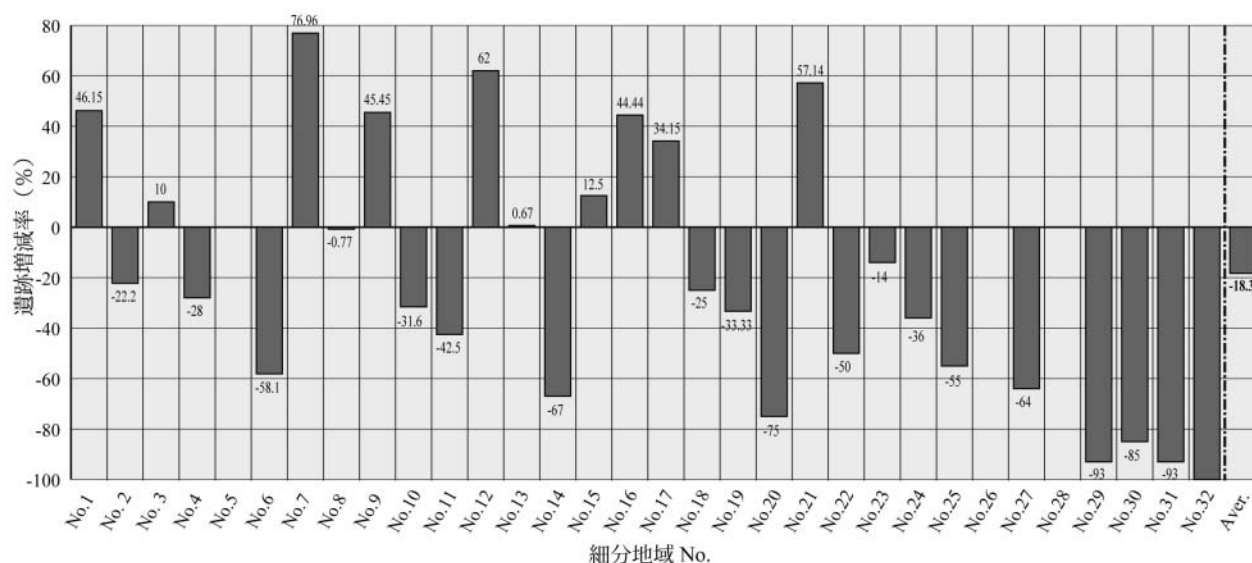


図8 EB I期からEB II期にかけての遺跡数の増減率

49.9%を示しており、遺跡増加地域の平均増加率 43.3%を上回っている (図8)。

大型遺跡数が減少する地域は、北西部 (No. 3) 西部 (No. 6)、中央部東寄り (No. 10)、南西部 (No. 15)、北東部 (Nos. 23, 24)、東部 (No. 25)、及び南東部 (Nos. 28, 29, 31) である。EB II-III期における全遺跡数がEB I期と比べ僅かに増加している No. 3 及び No. 15 地域を除いて、上記全ての地域において、EB II-III期の全遺跡数の減少を確認できる。なお、No. 1 及び No. 15 地域についても、2 遺跡程度の増加を示すにとどまり、説明が困難になるほど顕著な例外とはいえないだろう。このため、全遺跡数の減少と大型遺跡の減少の間に相関関係を見出してよいと判断できる。

次に、以上の地域における大型遺跡の継続率を示す (図10)。大型遺跡の継続率は、全体で 52.8%を示し、遺跡全体の継続率を上回っていることがわかる。ただし、ここでも地域的に検討すると様相が全く異なっているのである。すなわち、大型遺跡が増加した地域については平均約 56%というやや高い大型遺跡継続率が示される一方、大型遺跡が減少した地域においては、大型遺跡継続率が平均約 48%にとどまっている。つまり、大型遺跡が増加した地域においては、EB I期から既に存在していた大型遺跡が存続した上で、EB II-III期に新たな大型遺跡が追加的に形成されたということを示している。また、大型遺跡が減少した地域に関しては、EB I期に営まれた大型遺跡の一部がEB II-III期の間に放棄されたことが、継続率の低下に影響していると考えられる。

地域性と全域的傾向

以上の分析から、パレスティナ地域において遺跡分布が顕著に変化する3地域を抽出することができる。すなわち、1) 中北部とその周辺地域、2) 南西部地域、そして3) 南東部地域、である。これら3地域における遺跡分布状況は特徴的な変遷を示している。また、上記3地域における傾向に比べてやや明瞭さに欠くものの、全体的な傾向もまた認めることができた。

1. 中北部とその周辺地域

EB I期において No. 4、No. 19 を中心とする地域に「遺跡分布の中心」が存在していたが、EB II-III期になると、上記の地域における遺跡数が減少する。とはいえ依然として分布密度が高い状況ではあるが、周辺地域における遺跡増加が顕著に認められるようになる。例えば、No. 7 地域では 11 遺跡の増加が認められ、また、北部の No. 1 地域においても 16 遺跡の増加が認められるのである。また、No. 17 地域及び No. 21 地域においても同様の状況が認められた。いずれの地域も「遺跡分布の中心」の周辺部に位置しているため、EB II-III期に入って、これら周辺地域へ居住が拡散した可能性を指摘することができる。しかも、これは単なる居住の拡散現象ではなく、「遺跡分布の中心」における減少傾向と連動している可能性がある。

また、EB II-III期の「遺跡分布の中心」地域 (Nos. 4, 19) における遺跡減少は、当該地域において同時に大型遺跡の増加が認められていることから、上記の拡散現象に加えて、地域的な集中現象とも関係していると捉えられる。

なお、遺跡の分布地域を考慮すると、当該地域は、No. 4 地域と No. 19 地域の境界を挟んで、東西に区分されうる。

2. 西部・南西部地域

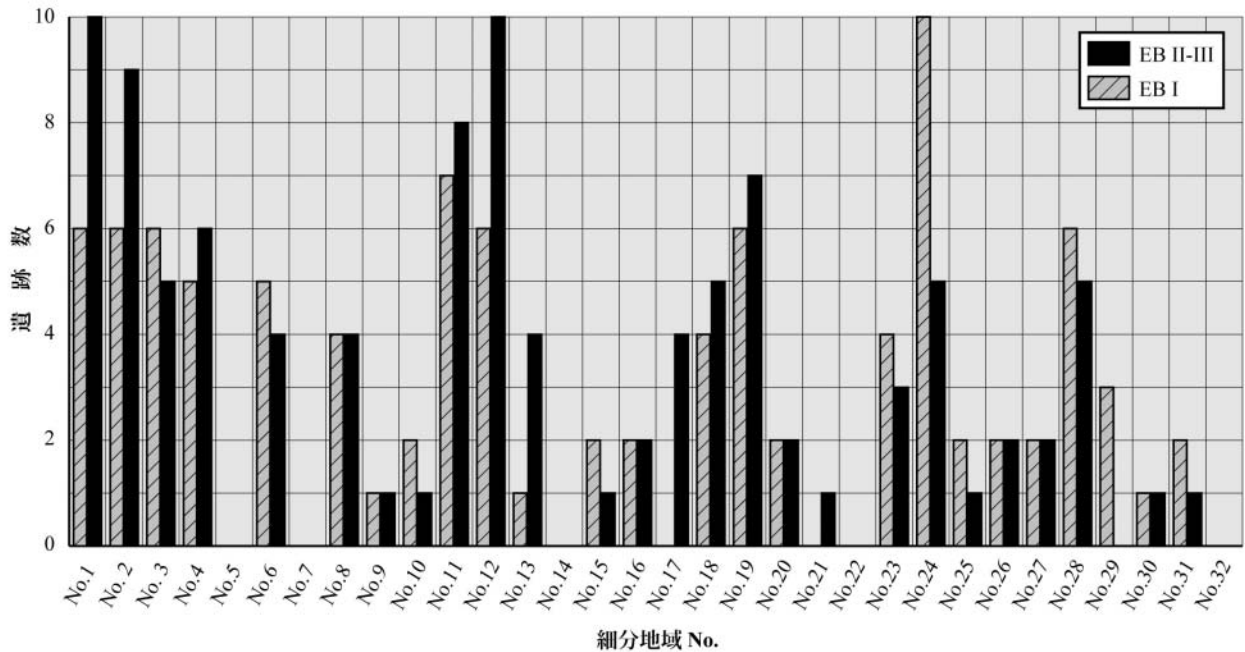


図9 EB I 期及び EB II-III 期における細分地域別大型遺跡数

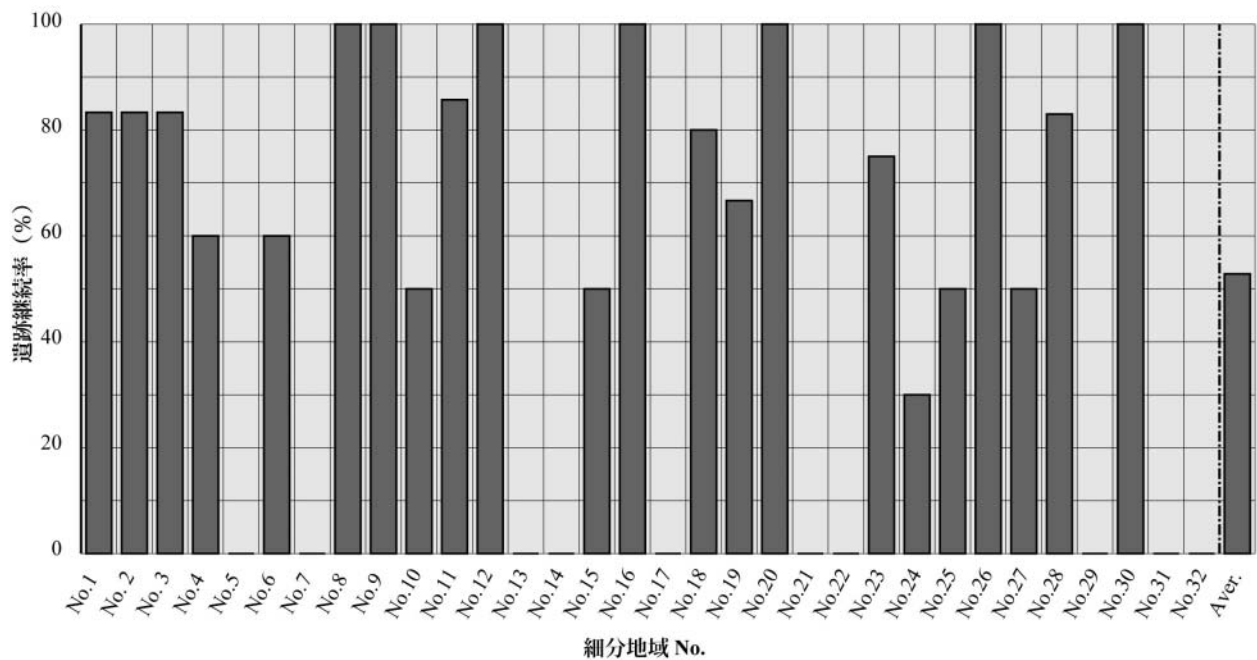


図10 EB I 期及び EB II-III 期における細分地域別大型遺跡継続率

EB I 期においては海岸平野 (Nos. 6, 11) に多くの遺跡が分布していたが、EB II-III 期にはより内陸の No. 12 地域とその周辺部 (Nos. 9, 13, 16) において遺跡集中が出現する。この現象は、EB II-III 期における海岸平野における遺跡の減少が著しい一方、No. 12 地域における遺跡増加が著しいことから、前者から後者への遺跡の集中が生じた可能性を想定することができるだろう。

3. 東部・南東部地域

EB I 期において No.29-31 地域の特にワディ・フィダン (Wadi Fidan) 中・上流沿いに集中的に分布していた遺跡群は、EB II-III 期にはほぼ消滅する。また、大型遺跡をほとんど確認できず、周辺に遺跡集中域の新たな出現も見出せないため、遺跡の利用自体が終焉を迎えたと考えられることができる。

4. 全体的傾向

上記 3 地域において特異で急激な変動を確認できたが、

全体的に見れば、EB II-III期のパレスティナ地域全域においては、遺跡数の減少と遺跡分布域の北西方向への狭小化・集中化、つまり、全域的な遺跡の局所化現象を認識することができた。具体的には、全32地域中19地域において遺跡数の減少が認められる上に、遺跡数は全地域平均で18.3%の減少を示しており(図8)、また、全体の遺跡継続率が平均で42.7%にとどまる(図7)。

これと並行して、地域的な遺跡の局所化現象、すなわち、各地域内における遺跡数の減少と大型遺跡への集約をも捉えることができる。なぜならば、大型遺跡については、遺跡数が減少した地域におけるその継続率の平均値でさえも、全体の遺跡継続率の平均値を5%程度上回っており(図7, 10)、遺跡の存続性が比較的高かったことが示されるからである。当該期における変化の基調を成すと捉えることのできる上のような全体的傾向もまた、見落とすわけにはいかない。

EB I期からEB II-III期にかけての変動―「都市化」過程と地域性

セトルメント・パターンの分析結果から、有意な諸傾向を把握することができた。以下では、これらを念頭に置き、EB II-III期パレスティナ地域における「都市化」過程について考察する。

1. 近年の「都市化」研究の特徴と問題点

パレスティナ地域における「都市化」現象は、前世紀半ば以降から議論の俎上に上がり始めた。しかしながら、当初の研究では、当該地域における「都市化」現象は、シリア・メソポタミア方面からの新しい人間集団の流入に帰され、メソポタミアなどの「都市化」の先行地域からの派生的現象にすぎないという伝播主義的な立場から理解されることが多かった(Kenyon 1960; Amiran 1970; Lapp 1970; de Vaux 1971)。

この後、V. G. チャイルド(Childe)による「都市化」の定義(Childe 1950)を改変して当該地域に適用したA. ケンピンスキ(Kempinski)による議論(Kempinski 1978)を経て、1980年代後半から、パレスティナ地域における「都市化」を、外的影響を一部認めつつも、主として内在的な要因の下に生じた連続的発展の結果として捉える傾向が強くなっていった(Ben-Tor 1992; Richard 1987; Mazar 1992)。

また、ほぼ同時期に、I. フィンケルシュタイン(Finkelstein)による諸論考(Finkelstein 1988, 1994)やミロシェジによる論考(Miroschedji 1989)などに見られるように、前4千年期後半から前2千年紀後半までのパレスティナ地域の社会的な盛衰を定住と遊牧の内在的な反復現象と捉える、周期的な文化史観が研究の根底に見出され

るようになっていく。この周期的な文化史観は、より短周期の形ではあるが、EB期における「都市化」過程の議論においても明確に認められる。この定住対遊牧という二項対立的図式によるEB期の理解は、先に挙げたポルトゥガリとゴフナによる論考(Portugali and Gophna 1993)や、フィンケルシュタインによる論考(Finkelstein 1991, 1995)に特に色濃く認められる。

上に挙げた近年の諸論考は、二項対立的な文化史観に基づいている点では共通しているものの、EB I期からEB II期にかけての「都市化」過程を、断絶的で急激な変化と捉えるか、あるいは、連続的で緩やかな変化と捉えるか、という点で大きな相違が認められるということも重要である。また、「都市化」の地域差の認識も両者において大きく異なる点も見逃せない。このように重要な論点を包含しているゆえ、以下で両論考を詳細に検討する。

まず、ポルトゥガリとゴフナは、EB I期からEB II期に至る過程で遺跡分布が顕著に変化し、大型・小型遺跡共に縮小あるいは放棄される状況から、安定(EB I期)→不安定(EB I期末期)→安定(EB II期)という変遷を捉えた(Portugali and Gophna 1993; Gophna 1995)。これらの論考では、一連の変動を、EB I期末の不安定期においてパレスティナ地域内での人間集団の移住及び遊牧化が生じた結果と解釈し、この際の移住地域が、主としてパレスティナ地域内であるとしている。そして、EB I期末の不安定期における移住・遊牧化により、在地的かつ比較的均一な都市社会が出現したとされる(Gophna 1995: 275)。この研究は、当該期における変動システムを明示した点で大きな意義を有するものである。

しかしながら、本稿における分析に鑑みた場合、少なくとも3つの問題点が浮かび上がる。1点目は、「都市化」現象が在地的かつ均一的に生じたとする解釈である。分析の結果は、「都市化」が均一的に生じたにしては、各地であまりにも特異な変動を示しているからである。2点目は、「社会-空間的危機」(Socio-Spatial Crisis)という用語で示された一連の移住・遊牧化の方向性について、中央高地への人口集中を想定している点である。しかし、この解釈とは反対に、EB II-III期の中央高地における遺跡分布は前時期に比べ希薄になったということが判明した。3点目は、彼らがEB I期からEB II期にかけての変動システムを議論の対象としているため、必ずしも問題とはならないかも知れないが⁷⁾、不安定期に移住・遊牧化が生じた直接的原因について、考えうる可能性にすら全く言及していないということである。

一方、フィンケルシュタインは、上のポルトゥガリとゴフナへの批判として執筆した論考において、EB I期末からEB II期にかけての「都市化」過程は急激な混乱や危機

を示すものではなく、より緩慢で段階的な変化を伴っていたと主張した (Finkelstein 1995: 54)。そして、「都市化」はパレスティナ地域において均一的に生じたわけではないとし、パレスティナ地域内の 2 つの地域における異なる社会発展過程を示している。1 つは、北部地域であり、北方の文化との関係性の中から「都市化」が生じたことが想定されている。2 つめは、南部沙漠地域の EB I 期において新しく興ったシステムである (Finkelstein 1991: 41-42, 1995: 54)。この「沙漠システム」は EB II 期に至って成熟を迎えた。なお、南部の海岸平野地域 (本稿における Nos. 11, 12, 15 に相当) は、エジプトの経済的領域とされ、EB I 期においては上記の 2 つのシステムとは区別されていたが、EB II 期にはそれらに吸収されたと考えられている (Finkelstein 1995: 55)。

分析結果から考えて、この論考もまた問題点を抱えている。まず、「都市化」を含む社会発展の地域差が指摘されているものの、あくまでも定住対遊牧という二項対立の中でそれを捉えており、北部で認められるとされた「都市化」という現象に内在する多様性・地域性に言及しているわけではないということ、つまり同一システム内における均一的な社会発展を暗示しているのである。また、EB II 期における南部の「沙漠システム」の成立は、セトルメント・パターンの分析結果からは検証ができない。

さて、上記の議論と問題点を踏まえて、次項では、当該期における遺跡分布傾向の変動の要因と「都市化」の様相について考察を進める。

2. 変動期における地域の様相

前節において、EB I 期から EB II-III 期にかけて認められたセトルメント・パターンの変化は、パレスティナ地域全域において決して一様な変遷を辿ったわけではないということをすでに確認した。すなわち、「拡散」(中北部とその周辺地域)、「集中」(西部・南西部地域)、そして「消滅」(南東部地域)という異なる変動を見せる 3 地域を見出せたわけである。実は、これらの諸現象は、ポルトゥガリとゴフナにより提示された不安定期における移住現象に包含されるのである。すなわち「移住」とは、「拡散」と「集中」という対極的な様態を、また、視点によっては居住地の「消滅」という現象をも示しうるからである。したがって、彼らが示した一地域への人口集中という移住形態 (Portugali and Gophna 1993: 178) は、移住という行為の一側面に他ならないのである。したがって、当該期パレスティナ地域においては、ポルトゥガリとゴフナにより示された「移住」現象が地域的に多様に生じていたと解することができる。

さて、これら 3 地域における「移住」形態が多様である理由として、その背景に異なる状況が存するものとする

ことができる。

まず、中北部とその周辺地域について、「拡散」現象が生じた理由に関しては現時点では説明が困難である。しかしながら、グリーンベルクによる研究は、この問題を今後詳細に検討する際の方向性を指し示してくれる。彼は、イスラエル北部に位置するフレイ渓谷における調査から、EB I 期末におけるほとんどの居住地の廃絶と、EB II 期における居住地の新たな急増を見出し、この断絶的現象を以下のように解釈した (Greenberg 2002: 93)。

- 1) EB II 期における居住地の新たな建設は、すでに都市文化を有した人間集団による移住の結果である。
- 2) 移住民の出身地は、大規模遺跡の連続的發展と EB II 期における衰退・廃絶から判断して、中央ヨルダン渓谷と考えられる。
- 3) 移住は、フレイ渓谷縁辺部がオリーブやブドウの栽培に適していることと、オリーブ・オイルやワインの搬出用土器 (硬質土器 Metallic Ware) 製作のための良質の粘土を採集できることを直接の理由として生じた。

彼の論考に即して考えるならば、EB II-III 期における中北部とその周辺地域において認められた遺跡の激減現象と、北部地域 (Nos. 1, 17, 21) や北西部地域 (No. 7) での遺跡の増加現象との連動を、前者から後者への人口移動として解釈できる可能性がある。この人口移動は、EB I 期におけるイズレエル平野 (No. 4) やヨルダン渓谷 (No. 19) などの可耕地への人口集中の結果として生じた耕作地不足の解消、あるいは、石灰質の丘陵地帯がその生育に適しているオリーブやブドウなどの果樹栽培 (Stager 1985: 173) を目的とした移住行動の結果であったのかもしれない。

次に、「集中」現象が認められた西部・南西部地域は、テル・エラニ (Tel 'Erani) やテル・マアハズ (Tel Ma'ahaz) 等、EB IB 期においてナイル河下流域 (エジプト) 系物質文化を伴う遺跡が密に分布しており (Brandl 1989; Kempinski and Gilead 1991; Amiran and van den Brink 2002; Beit-Arie and Gophna 1999)、パレスティナ地域とナイル河下流域 (エジプト) の関係において重要な地域 (「交換の場」) と捉えることができる⁸⁾ (山藤 2007)。また、この両地域の関係は、オリーブ・オイルとワインの交易を軸としており、南西部地域を含む中央高地西部はオリーブとブドウの栽培に適した土地であったと考えられていることから (Finkelstein and Gophna 1993: 13-14; Stager 1985: 173)、EB II 期における遺跡分布状況に、上記の EB I B 期における関係が間接的に影響している可能性を否定できない。これについては、次項において詳述する。

最後に、遺跡の「消滅」現象が認められた東部・南東部

地域については、EB II期における大型遺跡アラド (Arad) とネゲヴ沙漠及びシナイ半島南・東部における小型遺跡との関係が説明の参考となりうる。EB II期には、ネゲヴ沙漠及びシナイ半島南・東部において、ナビ・サラ (Nabi Salah) 等の多くの小型遺跡が確認されており、銅交易を目的としたアラドとの関係が指摘されている (Beit-Arieh 1983: 47; Ilan and Sebbane 1989: 154)。パレスティナ地域の東部・南東部においても、これと同様の現象がすでにEB I期に生じていた可能性がある。というのも、当該地域の少し南方には、銅の採掘地として著名なフェイナン (Feinan) が位置しており、銅石器時代からEB I期にかけての銅生産が認められているからである (Ilan and Sebbane 1989: 142-48; Levy et al. 2001: 162)。しかし、EB II期に入ると、この地における銅生産の証拠が見出せなくなるという (Ilan and Sebbane 1989: 156)。これを銅生産の終焉と捉えるならば、近隣の東部・南東部における遺跡の「消滅」現象と相関している可能性がある。とすれば、この現象は一体どのような要因の下に生じたのだろうか。おそらく、EB II期における銅を目的としたネゲヴ沙漠やシナイ半島南・東部への進出、つまり、フェイナンからネゲヴ沙漠・シナイ半島南・東部への銅採掘地の移り変わりが直接の原因となったのであろう。なお、このシフトを引き起こした要因については、ナイル河下流域 (エジプト) との関係の変化も考えうるが、現在のところ保留せざるを得ない。

さて、上記の諸変動をも包含して、パレスティナ地域を全域的に見た場合、先述のように、EB II-III期では遺跡数が減少し、遺跡分布が北西方向に局所化する傾向 (遺跡分布域の狭小化) を総じて見出せた。この現象に加えて、上記3地域において認められた顕著な変動の余波を一部で受けながらも、地域的な局所化現象、すなわち、小型遺跡の放棄の結果としての大型遺跡への人口の集中と解しえる現象が、パレスティナ地域全域において生じていた可能性を指摘できる。おそらく、各地域的な局所化現象に伴う遺跡減少率の違いから、全域的な遺跡分布の局所化 (分布域の北西方向への狭小化) が生じたと考えられる。

以上から、セトルメント・パターン分析の結果に照らして、EB II-III期に至る過程においては、3地域におけるそれぞれ特異で急激な諸変化と、全域的・段階的に進行する遺跡の減少・局所化現象が共に見られた。これら、速度も規模も異なる2つの変動過程が同時に進行し、変動の二層構造を成していたと捉えることができよう。このように、地域的に特異な変動を生じさせ、「都市化」過程におけるセトルメント・パターンの変化を二層構造化した要因の1つとして、ナイル河下流域 (エジプト) との関係の影響を想定することができる。

3. 外部接触の影響—エジプトの後退と「都市化」

ここまで、パレスティナ地域内部に視点をおいて、そのセトルメント・パターンの変化から「都市化」過程の検討を行ってきた。しかしながら、紀元前4千年紀後半期から紀元前3千年紀初頭という時期の当該地域を研究する際には、周辺の地域、とりわけナイル河下流域 (エジプト) との関係を検討しないわけにはいかないだろう。

先に、EB II-III期のパレスティナ地域における変動の二層構造に言及したが、この構造の形成に、少なからずナイル河下流域 (エジプト) との交流が影響しているとみなすことができる。というのは、急激な変動の認められた3地域は、オリーブ・オイルとワインの製造、また、銅の生産といった特定の経済活動と比較的強く結び付けられうるからである。従来、EB I期において、ナイル河下流域系文化を担う人間集団 (あるいは「エジプト人」) がこれらの産物を求めてパレスティナ地域に進出したといわれており (Iran 2002: 316-318)、パレスティナ地域とナイル河下流域 (エジプト) から多量に出土する相互の物質文化によって、この両地域間の関係がかなり活発であったことが示されている (Levy and van den Brink 2002; Miroshedji 2002; Braun 2002; 山藤 2007; Dreyer 1998; Hartung 2002.)。ところが、EB II期に入ると、パレスティナ地域からはナイル河下流域系の遺物がほとんど出土しなくなる。一方、ナイル河下流域 (エジプト) においては、王墓等への副葬品という形で、硬質土器に代表される良質なパレスティナ地域系土器の出土が知られている (Ben-Tor 1986: 16, 1992: 107-109; Stager 1992: 37-39; 中野 1996)。

EB II期において、パレスティナ地域からナイル河下流域系の物質文化がほとんど認められなくなること、すなわち、第1王朝エジプトの当該地域からの経済的後退は、パレスティナ地域におけるEB II期の社会発展に少なからぬ影響を与えたと考えられる。すなわち、先に遺跡分布傾向に急激な変化が見られた3地域のうち2地域における変動は、EB I期からEB II期にかけてのナイル河下流域 (エジプト) との経済的関係という文脈で比較的適切に理解できる可能性がある。

まず、中北部とその周辺地域で生じた「拡散」現象について、この現象がオリーブやブドウの栽培に関連付けられるとすれば、これらの加工品であるオリーブ・オイルやワインを他地域へ輸出することを主目的として、EB II期に移住が生じた可能性がある。実際に輸出が行われた重要な証拠は、エジプト第1王朝の墓域から出土する硬質土器の存在である。この土器は、EB II-III期におけるパレスティナ地域北部に特徴的な遺物であり (Greenberg and Porat 1996; Philip and Baird 2000: 8, 17-18) (図11)、高い焼成温度により硬く焼きしまっている上に、アルミニウム珪酸

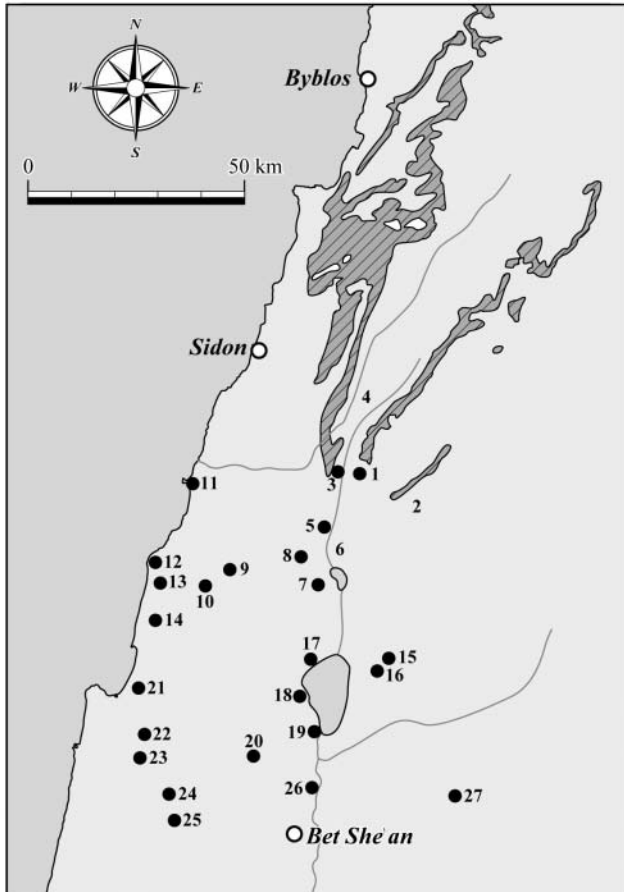


図 11 パレスティナ地域北部における硬質土器出土主要遺跡分布 (Greenberg and Porat 1996: fig. 5 を基に作成)

* 斜線部分は下部白亜紀ハティラ累層の露頭を示す。

1. テル・ダン; 2. ゴラン高原北部; 3. テル・アベル・ベト・マアカ; 4. レバノン、ベッカー溪谷; 5. テル・テオ; 6. フレー溪谷; 7. ハツォール; 8. テル・ケデシュ; 9. テル・ロシュ; 10. メオナ; 11. ティール; 12. ロシュ・ハ・ニクラ; 13. テル・カブリ; 14. ベト・ハ・エメク; 15. ガムラ; 16. レヴィア・エンクロージャー; 17. テル・キンロート; 18. テル・レケト (ヒルベト・エル・クネイトラ); 19. テル・ベト・イエラハ; 20. テル・キシオン; 21. キリヤト・アタ; 22. テル・カシシュ; 23. テル・ヨクネアム; 24. メギッド; 25. タアナク; 26. テル・ヤクシュ; 27. ヒルベト・エッ・ゼラクン

塩粘土を利用していることから酸化作用に強く、また滲出もしないため、液体物の輸送に適している (Ben-Tor 1992: 108)。また、サッカラ (Saqqara) やアビュドス (Abydos) に所在するエジプト第 1 王朝の王墓から出土した硬質土器の多くは、いわゆる「アビュドス土器」 (Abydos Ware) と呼称される良質な土器であった (中野 1996: 27)。この「アビュドス土器」には赤色磨研土器と彩文土器という 2 種類が認められるが、より出土数量の多い赤色磨研土器について、そのほとんどが水差し形や環状把手を伴う有頸壺であったことから、その内容物がオリーブ・オイルやワイン等の液体物であった可能性が高い

(Stager 1992: Fig.14; Ben-Tor 1992: 108)。以上の証拠は、EB II-III 期における遺跡の「拡散」現象が、エジプトとの交易活動を 1 つの目的として⁹⁾、オリーブやブドウの栽培に適した丘陵地が連なる上ガリラヤ地方への移住・居住地の建設の結果として生じた、という可能性を示唆している。

西部・南西部地域において生じた「集中」現象もまた、オリーブ・オイルやワインの生産・輸出と関連していたとみなすことができる。すなわち、これは、EB I 期においてナイル河下流域からの影響が強く認められたことと関係していると考えられる。EB IB 期には、L. E. ステイガーにより果実栽培に適しているとされた中央高地の丘陵部 (Stager 1985) の山麓部分、すなわちパレスティナ地域西部・南西部地域の諸遺跡において、ナイル河下流域系物質文化が在地のパレスティナ地域在地系物質文化と共存する形で認められた (山藤 2007)。したがって、おそらく、この地域からナイル河下流域へオリーブ・オイルやワインの輸出が行われていたと推測できる。後の EB II 期に、両地域間の関係が減衰すると、以前にナイル河下流域 (エジプト) からの経済的影響が強かった西部・南西部地域に、経済的な真空地帯が生じたであろう。この真空地帯に流入し、従来「エジプト人」たちが作り上げたシステムの下に、新たな経済活動に従事し始めた結果として、西部・南西部地域への居住地の「集中」が生じたと考えうる。すなわち、西部・南西部地域における遺跡の「集中」現象は、後背の丘陵部におけるオリーブやブドウの栽培、また、収穫物からのオリーブ・オイルやワインの製造を「エジプト人」が構築したシステムに則って管理するために、当該地域に居住地 (「都市」) が建設された結果、と捉えることができるのである。

以上、中北部とその周辺地域における「拡散」現象、及び西部・南西部における「集中」現象という 2 つの変動を、ナイル河下流域 (エジプト) との関係から考察した。前者と後者では、ナイル河下流域からの影響を共に受けていたとしても、時期・種類に関して著しい相違が見られる。しかし、いずれにせよ、オリーブは播種後 5～6 年、ブドウは播種後 3 年というように、これらの作物の栽培にはその収穫までのブランクと多大な投資を伴うわけであるから (Zohary and Hopf 2000: 145, 152)、何らかの経済的関係を目的とした一定規模の果実栽培を開始する以前に、多大な投資とそのリスクに耐えうる「都市」社会がすでに成立していた可能性が高いのである。したがって、オリーブ・オイルやワインを主な輸出品と想定するナイル河下流域 (エジプト) との関係を、パレスティナ地域における「都市化」の主要な要因と捉えることはできない。すなわち、中北部とその周辺地域に見られた「拡散」現象は、「都市化」に直接伴うものではないということになるのである。

おわりに―「都市化」過程の理解―

分析において認められたセトルメント・パターンの地域的変動は、EB I期からEB II-III期におけるパレスティナ地域が、必ずしも一定の行程にしたがって均一的に「都市化」に至ったわけではないことを示した。「都市化」過程においては、遺跡の「拡散」、「集中」、及び「消滅」という少なくとも3種類のセトルメント・パターンの変化が認められたからである。この地域差の把握により、EB I期からEB II期の変動期における中央高地への人口のシフトという一元的な見解 (Portugali and Gophna 1993: 178) は、もはや成立しないと言えるだろう。

しかしながら、各地域において生じた急激な変動とは別に、パレスティナ地域全域における遺跡の減少と遺跡分布域の狭小化、すなわち、地域的な遺跡の局所化現象の全域的展開、という大きな傾向を見出せた。このことから、EB I期からEB II期にかけての「都市化」過程を、単に地域的多様性という観点から捉えるのではなく、地域的に多様で急激な諸変動と全域的で緩慢な変化という二層構造的観点から理解することが必要となるのである。

また、本稿では、セトルメント・パターンの地域的な急激な諸変動について具体的な原因を考察した。この結果、中北部とその周辺地域及び西部・南西部地域において認められた変動の背景にオリーブやブドウの栽培を、そして、東部・南東部地域において認められた変動の背景に銅生産活動の終焉を推測した。そして、前2者における経済活動が生じた1つの原因として、ナイル河下流域 (エジプト) との関係が与えた影響を挙げた。しかしながら、オリーブやブドウの栽培には多大な投資とそれに耐えうるほど十分に組織化された社会が必要であったと考えられるため、オリーブ・オイルやワインの交易活動を「都市化」の要因とすることは、順序としては逆であろう。したがって、製品輸出による交易を想定させる、中北部とその周辺地域における「拡散」現象は、EB II期初めにおける「都市化」直後に生じた変動であった蓋然性が高いといえる。すなわち、EB I期からEB II-III期にかけてのセトルメント・パターンに認められる急激な変動は、必ずしも「都市化」の直接的様相を示しているわけではない、ということを理解できるのである。

結論として、セトルメント・パターンにおいて認められた諸変動から、全域的な遺跡の局所化現象が変動の基底部を成し、この上部に同時的 (南西部地域) あるいは後続的 (中北部地域とその周辺) に「集中」及び「拡散」という急激な変動が生じたという、二層構造的な「都市化」過程を想定できた。そして、このような「都市化」過程において、上部構造として認識される特異な諸変動は、部分的にナイル河下流域 (エジプト) の経済的影響を受けた可能

性を示唆していた。なお、「都市化」過程の基底部を成すと捉えられた全域的な変動現象の要因については、本稿では具体的に踏み込めなかったものの、パレスティナ地域内における物質文化の詳細な分析を通じて、今後明らかにされなければならない課題である。

謝辞

本稿執筆に際しては、指導教授である近藤二郎先生に懇切丁寧なご指導を賜った。また、イスラエル考古学に携わる諸氏や早稲田大学大学院の諸学友にも貴重なご助言をいただいた。本稿校正の際には、山吉裕子氏にご協力いただいた。以上の方々に謹んで御礼申し上げます。

註

- 1) 前期青銅器時代編年の絶対年代については、EB II期まではR. アミラン (Amiran) とR. ゴフナ (Gophna) によるエジプトとの交差編年の研究 (Amiran and Gophna 1992) を参照し、EB III期についてはA. マザール (Mazar) により提示された年代 (Mazar 1992) に基づく。
- 2) 分布調査の精度の問題については、D. エッセ (Esse) による指摘がある (Esse 1991)。彼は、A. ラバン (Raban) やN. ツオリ (Zori) 等によるイズレエル平野東部とその周辺の分布調査を検討し、1) 土器片の小さな散乱地ですら1遺跡としてカウントされた危険性、2) 表面採集資料による時期決定の不正確さ (時期決定の誤謬)、そして3) 異なる時期・調査主体・目的の下に行われた分布調査はかなり異なる結果を示しうること、以上の3つの問題点に言及している (Esse 1991: 128-129)。
本稿において利用した分布調査による遺跡データについても、上記のような問題点を内包している可能性があり、本稿での分析に何らかの影響を与えうるということを念頭に置かざるを得ない。
- 3) なお、特に広域を占める森林域では、セイチガシ *Quercus calliprinos* やカシ *Quercus ithaburensis* が卓越しており、高地では常緑樹が繁茂していたと考えられている (von Zeist and Bottema 1991: 109, Fig. 40)。
- 4) 年降水量については、マクドナルドによる論考を参照した (MacDonald 2001)。
- 5) イスラエルに所在する遺跡については、ほぼ確実に墓地遺跡を除外できたと考えている。しかしながら、ヨルダンに所在する遺跡については、遺跡種類の判定が困難な場合があり、墓地遺跡が多少混在している可能性があることを断っておく。
なお、イスラエルにおいては、約30の単独で存在する墓地遺跡を確認している。
- 6) 本稿では、EB II-III期を一括して扱う。その理由は、1) 当該期の遺跡データを集成する際に利用した一覧 (Broshi and Gophna 1984) において、少なからぬ遺跡についてEB II期とEB III期が区別して提示されていなかったため、また、2) 中央高地においてEB II期とEB III期の遺跡が区別されていなかったため、である。

しかしながら、この時期区分がセトルメント・パターンに与える傾向については、先行研究からある程度予想ができる。すなわち、銅石器時代からEB III期の海岸平野を対象とした論考においては、EB II期とEB III期のセトルメント・パターンに顕著な相違は認められず、遺跡数については、EB III期に至って減少する傾向を看取できる (Gophna and Portugali 1988: 15-17)。また、ヨルダン川東岸においても、上記と同様の傾向を看取できた

- (The National Information Technology Centre (NITC) 2006; Savage 1998-2007)。
- 7) この点については、彼ら自身言及している。彼らが扱っているのはあくまでもシステムであり、このようなシステムの特徴として、単一の因果関係に左右されないとしている (Portugali and Gophna 1993: 182)。
- 8) この地域には、EB I B 期においてナイル河下流域系物質文化が比較的色彩濃く認められるテル・ハリフ (テラス) も所在する。しかしながら、この遺跡においては、EB II 期に相当する文化層が認められない (Seger et al. 1990: 3)。次の EB III 期に相当する文化層の存在は確認されているため、EB II 期に一時的な居住地の放棄があったということが示唆される。
- 9) 中野氏によれば、第 1 王朝期のナイル河下流域では、非完形も含めた赤色磨研土器が 4 遺跡において計 242 点出土している (中野 1996: 27)。これは、出土遺跡数・点数共に決して多い数ではないため、オリブ・オイルやワインの輸出先についてはパレスティナ地域内も考慮しなければならないだろう。このような地域内交易活動を示唆する現象として、テル・エル・ファラ (北) (Tell el-Far'ah North)、テル・エラニ (Tel 'Erani)、及びアラド (Arad) 等のパレスティナ地域南部に加えてシナイ半島北部の諸遺跡から、断片的に硬質土器が出土するという事実を挙げることができる (Greenberg and Porat 1996: 11)。
- 引用・参考文献
- Amiran, R. 1970 The Beginnings of Urbanization in Canaan. In J.A. Sanders (ed.), *Near Eastern Archaeology in the Twentieth Century: Essays in Honor of Nelson Glueck*, 83-100. Garden City, New York, Doubleday.
- Amiran, R. and R. Gophna 1992 The Correlation between Lower Egypt and Southern Canaan during the Early Bronze I Period. In E.C.M. van den Brink (ed.), *The Nile Delta Transition: 4th-3rd Millennium B.C.*, 357-360. Tel Aviv.
- Amiran, R. and E. C. M. van den Brink 2002 The Ceramic Assemblage from Tel Ma'ahaz, Stratum I (Seasons 1975-1976). In E.C.M. van den Brink and T.E. Levy (eds.), *Egypt and the Levant: Interrelations from the 4th through the Early 3rd millennium BCE*, 273-279. London/New York, Leicester University Press.
- Bar-Adon, P. 1972 The Judaeian Desert and Plain of Jericho. In M. Kochavi (ed.), *Judaea, Samaria and the Golan: Archaeological Survey 1967-1968*, 92-149. Jerusalem, Carta. The Archaeological Survey of Israel. (Hebrew).
- Beit-Arieh, I. 1983 Central-Southern Sinai in the Early Bronze Age II and its Relationship with Palestine. *Levant* 15: 39-48.
- Beit-Arieh, I. and R. Gophna 1999 The Egyptian Protodynastic (Late EB I b) Site at Tel Ma'ahaz: A Reassessment. *Tel Aviv* 26: 191-207.
- Beit-Arieh, I. 2003 *Map of Tel Malhata (144)*. Jerusalem, The Israel Antiquities Authority.
- Ben-Tor, A. 1986 The Trade Relations of Palestine in the Early Bronze Age. *Journal of the Economic and Social History of the Orient* 29: 1-27.
- Ben-Tor, A. 1992 The Early Bronze Age. In A. Ben-Tor (ed.), *The Archaeology of Ancient Israel*, 81-125. New Haven, Yale University Press.
- Berman, A. and L. Barda 2005 *Map of Nizzanim-West (87), Map of Nizzanim-East (88)*. Jerusalem, The Israel Antiquities Authority.
- Berman, A. and L. Barda, and H. Stark 2005 *Map of Ashdod (84)*. Jerusalem, The Israel Antiquities Authority.
- Berman, A., H. Stark, and L. Barda 2004 *Map of Ziqim (91)*. Jerusalem, The Israel Antiquities Authority.
- Brandl, B. 1989 Observations on the Early Bronze Age Strata of Tel Erani. In P. de Miroschedji (ed.), *L'urbanisation de la Canaan à l'âge du Bronze ancien*, 357-387. Oxford, BAR International Series 527 (ii).
- Braun, E. 2002 Egypt's First Sojourn in Canaan. In E.C.M. van den Brink and T.E. Levy (eds.), *Egypt and the Levant: Interrelations from the 4th through the Early 3rd millennium BCE*, 173-189. London/New York, Leicester University Press.
- Broshi, M. and R. Gophna 1984 The Settlement and Population of Palestine During the Early Bronze Age II-III. *Bulletin of the American Schools of Oriental Research* 253: 41-53.
- Childe, V.G. 1950 The Urban Revolution. *The Town Planning Review* 21(1): 3-17.
- Dagan, Y. 1992 *Map of Lakhish (98)*. Jerusalem, The Israel Antiquities Authority.
- Dreyer, G. 1998 *Umm el-Qaab I: Das Prädynastische Königsgrab U-j und seine frühen Schriftzeugnisse*. Mainz, Verlag Philipp von Zabern.
- Epstein, C. and S. Gutman 1972 The Golan. In M. Kochavi (ed.), *Judaea, Samaria and the Golan: Archaeological Survey 1967-1968*, 244-298. Jerusalem, Carta. The Archaeological Survey of Israel. (Hebrew).
- Esse, D.L. 1991 *Subsistence, Trade, and Social Change in Early Bronze Age Palestine*. Studies in Ancient Oriental Civilization 50. Chicago, The Oriental Institute, University of Chicago.
- Falconer, S. E. and S. H. Savage 1995 Heartlands and Hinterlands: Alternative Trajectories of Early Urbanization in Mesopotamia and the southern Levant. *American Antiquity* 60 (1): 37-58.
- Finkelstein, I. 1988 *Archaeology of the Israelite Settlement*. Jerusalem, Israel Exploration Society.
- Finkelstein, I. 1995 Two notes on Early Bronze Age urbanization and urbanism. *Tel Aviv* 22: 47-69.
- Finkelstein, I. and R. Gophna 1993 Settlement, Demographic, and Economic Patterns in the Highlands of Palestine in the Chalcolithic and Early Bronze Periods and the Beginning of Urbanism. *Bulletin of the American Schools of Oriental Research* 289: 1-22.
- Finkelstein, I. and Y. Magen (eds.) 1993 *Archaeological Survey of the Hill Country of Benjamin*. Jerusalem, The Israel Antiquities Authority.
- Finkelstein, I. 1994 The Emergence of Israel: A Phase in the Cyclic History of Canaan in the Third and Second Millennia BCE. In I. Finkelstein and N. Na'aman (eds.), *From Nomadism to Monarchy: Archaeological and Historical Aspects of Early Israel*, 150-178. Jerusalem, Yad Izhak Ben-zvi. Israel Exploration Society.
- Frankel, R. and N. Getzov 1997 *Map of Akhziv (1), Map of Hanita (2)*. Jerusalem, The Israel Antiquities Authority.
- Frankel, R., N. Getzov, M. Aviam and A. Degani 2001 *Settlement Dynamics and Regional Diversity in Ancient Upper Galilee: Archaeological Survey of Upper Galilee*. IAA Reports No. 14. Jerusalem, Israel Antiquities Authority.
- Gal, Z. 1991 *Map of Gazit (46)*. Jerusalem, The Israel Antiquities Authority.
- Gal, Z. 1998 *Map of Har Tavor (41), Map of 'En Dor (45)*. Jerusalem, The Israel Antiquities Authority.
- Gazit, D. 1996 *Map of Urim (125)*. Jerusalem, The Israel Antiquities Authority.
- Getzov, N., Y. Paz and R. Gophna. 2000 *Shifting Urban Landscapes during the Early Bronze Age in the Land of Israel*. Tel Aviv, Tel Aviv University Press.
- Gophna, R. 1984 The Settlement Landscape of Palestine in the Early Bronze Age II-III and Middle Bronze Age II. *Israel Exploration Journal* 34 (1): 24-31.

- Gophna, R. 1995 Early Bronze Age Canaan: Some Spatial and Demographic Observations. In T. E. Levy (ed.), *The Archaeology of Society in the Holy Land*, 269-280. London, Leicester University Press.
- Gophna, R. and Y. Porat 1972 The Land of Ephraim and Manasseh. In M. Kochavi (ed.), *Judaea, Samaria and the Golan: Archaeological Survey 1967-1968*, 196-241. Jerusalem, Carta. The Archaeological Survey of Israel. (Hebrew).
- Gophna, R. and J. Portugali 1988 Settlement and Demographic Processes in Israel's Coastal Plain from the Chalcolithic to the Middle Bronze Age. *Bulletin of the American Schools of Oriental Research* 269: 11-28.
- Greenberg, R. 2002 *Early Urbanizations in the Levant: A Regional Narrative*. New Approaches to Anthropological Archaeology. New York and London: Continuum.
- Greenberg, R. and N. Porat 1996 A Third Millennium Levantine Pottery Production Center: Typology, Petrography, and Provenance of the Metallic Ware of Northern Israel and Adjacent Regions. *Bulletin of the American Schools of Oriental Research* 310: 5-24.
- Hartung, U. 2002 Imported Jars from Cemetery U at Abydos and the Relations between Egypt and Canaan in Predynastic Times. In E.C.M. van den Brink and T.E. Levy (eds.), *Egypt and the Levant: Interrelations from the 4th through the Early 3rd millennium BCE*, 437-449. London/New York, Leicester University Press.
- Ilan, O. 2002 Egyptian Pottery from Small Tel Malhata and the Interrelations between the Egyptian 'Colony' in Southwest Palestine and the 'Canaanite' Arad Basin and Central Highlands. In E.C.M. van den Brink and T. E. Levy (eds.), *Egypt and the Levant: Interrelations from the 4th through the early 3rd Millennium BCE*, 306-322. London/New York, Leicester University Press.
- Ilan, O. and M. Sebbane 1989 Copper Metallurgy, Trade and the Urbanization of Southern Canaan in the Chalcolithic and Early Bronze Age. In P. de Miroschedji (ed.), *L'urbanisation de la Canaan à l'âge du Bronze ancien*, 139-162. Oxford, BAR International Series 527(i).
- Israel Antiquities Authority 2007 *Israel Antiquities Authority*. http://www.antiquities.org.il/home_eng.asp
- Joffe, A. H. 1991 Early Bronze I and the Evolution of Social Complexity in the Southern Levant. *Journal of Mediterranean Archaeology* 4 (1): 3-58.
- Joffe, A. H. 1993 *Settlement and Society in the Early Bronze Age I and II, Southern Levant: Complementarity and Contradiction in a Small-scale Complex Society*. Oxford, Sheffield Academic Press. Monographs in Mediterranean Archaeology 4.
- Kallai, Z. 1972 The Land of Benjamin and Mt. Ephraim. In M. Kochavi (ed.), *Judaea, Samaria and the Golan: Archaeological Survey 1967-1968*, 153-193. Jerusalem, Carta. The Archaeological Survey of Israel. (Hebrew).
- Kempinski, A. 1978 *The Rise of an Urban Culture, the Urbanization of Palestine in the Early Bronze Age*. Jerusalem, Israel Ethnographic Society.
- Kempinski, A. and I. Gilead 1991 New Excavations at Tel Erani: A Preliminary Report of the 1985-1988 Seasons. *Tel Aviv* 18 (2): 164-191.
- Kenyon, K. M. 1960 *Archaeology in the Holy Land*. London: Ernest Benn Limited. (1979, 4th ed.)
- Kochavi, M. 1972 The Land of Judah. In M. Kochavi (ed.), *Judaea, Samaria and the Golan: Archaeological Survey 1967-1968*, 19-89. Jerusalem, Carta. The Archaeological Survey of Israel. (Hebrew).
- Kochavi, M. (ed.). 1972 *Judaea, Samaria and the Golan: Archaeological Survey 1967-1968*. Jerusalem, Carta. The Archaeological Survey of Israel.
- Kochavi, M. and I. Beit-Arieh 1994 *Map of Rosh Ha-'Ayin (78)*. Jerusalem, The Israel Antiquities Authority.
- Lapp, P.W. 1970 Palestine in the Early Bronze Age. In J.A.Sanders (ed.), *Near Eastern Archaeology in the Twentieth Century: Essays in Honor of Nelson Glueck*, 101-131. Garden City, New York, Doubleday.
- Levy, T. E., R. B. Adams, A. J. Witten, J. Anderson, Y. Arbel, S. Kuah, J. Moreno, A. Lo, and M. Wagonner 2001 Early Metallurgy, Interaction, and Social Change: the Jabal Hamrat Fidan (Jordan) Research Design and 1998 Archaeological Survey: Preliminary Report. *Annual of the Department of Antiquities of Jordan* 45: 159-187.
- Levy, T.E. and E.C.M. van den Brink 2002 Interaction Models, Egypt and the Levantine Periphery. In E.C.M. van den Brink and T.E. Levy (eds.), *Egypt and the Levant: Interrelations from the 4th through the Early 3rd millennium BCE*, 3-38. London/New York, Leicester University Press.
- MacDonald, B. 2001 Climatic Changes in Jordan through Time. In B. MacDonald, R. Adams, and P. Bienkowski (eds.), *The Archaeology of Jordan*, 595-601. Sheffield, Sheffield Academic Press.
- Mazar, A. 1990 *Archaeology of the Land of the Bible: 10,000-586 B.C.E.* New York, Doubleday.
- Miroschedji, P. de 1989 Le processus d'urbanisation en Palestine au Bronze ancien: chronologie et rythmes. In P.de Miroschedji (ed.), *L'urbanisation de la Palestine à l'âge de Bronze ancien*, 63-79, Oxford, BAR International Series 527 (i).
- The National Information Technology Centre (NITC) 2006 *Jordan Antiquities Database and Information System*. <http://www.nis.gov.jo/pls/anti>.
- Ne'eman, Y. 1990 *Map of Ma'anit (54)*, 15-20. Jerusalem, The Israel Antiquities Authority.
- Ne'eman, Y., S. Sender, and E. Oren 2000 *Map of Mikhmoret (52), Map of Hadera (53)*. Jerusalem, The Israel Antiquities Authority.
- Olami, Y. 1981 *Daliya Map (31)*, 15-20. Jerusalem, The Archaeological Survey of Israel.
- Olami, Y. and Z. Gal 2003 *Map of Shefar'am (24)*. Jerusalem, The Israel Antiquities Authority.
- Olami, Y., A. Ronen, and A. Romano 2003 *Map of Haifa-West (22)*. Jerusalem, The Israel Antiquities Authority.
- Olami, Y., S. Sender, and E. Oren 2004 *Map of Yagur (27)*. Jerusalem, The Israel Antiquities Authority.
- Olami, Y., S. Sender, and E. Oren 2005 *Map of Binyamina (48)*. Jerusalem, The Israel Antiquities Authority.
- Philip, G. and D. Baird 2000 Early Bronze Age Ceramics in the Southern Levant: an Overview. In G. Philip and D. Baird (eds.), *Ceramic and Change in the Early Bronze Age of the Southern Levant*, 3-29. Sheffield, Sheffield Academic Press.
- Portugali, Y. and R. Gophna 1993 Crisis, Progress and Urbanization: The Transition from Early Bronze I to Early Bronze II in Palestine. *Tel Aviv* 20: 164-186.
- Raban, A. 1982 *Archaeological Survey of Israel, Nahalal Map (28)*, 16-23. Jerusalem, The Archaeological Survey of Israel.
- Raban, A. 1999 *Map of Mishmar Ha-'Emeq (32)*. Jerusalem, The Israel Antiquities Authority.
- Richard, S. 1987 The Early Bronze Age: The Rise and Collapse of Urbanism. *Biblical Archaeologist* 50: 22-44.
- Ronen, A. and Y. Olami 1978 1. 'Atlit Map (26). Jerusalem, The Archaeological Survey of Israel.
- Ronen, A. and Y. Olami 1983 *Map of Haifa-East (23)*, 15-24. Jerusalem,

- The Archaeological Survey of Israel.
- Savage, S. H. 1998-2007 *Interactive Maps of Archaeological Sites in Jordan*. <http://archaeology.asu.edu/Jordan/jordmaps.html>.
- Seger, J. D., B. Baum, O. Borowski, D. P. Cole, H. Forshey, E. Futato, P. F. Jacobs, M. Laustrop, P. O. Seger, and M. Zeder 1990 The Bronze Age Settlements at Tell Halif: Phase II Excavations, 1983-1987. *Bulletin of the American Schools of Oriental Research Supplement* 26: 1-32.
- Stager, L.E. 1985. The Firstfruits of Civilization. In J.N. Tubb (ed.), *Palestine in the Bronze and Iron Ages: Papers in honour of Olga Tufnell*, 172-188. London, The Institute of Archaeology.
- Stager, L.E. 1992 The Periodization of Palestine from Neolithic through Early Bronze Times. . In R.W. Ehrich (ed.), *Chronologies in Old World Archaeology* (Third Edition), Volume I, 22-41. Chicago and London, The University of Chicago Press.
- van Zeist, W. and S. Bottema 1991 *Late Quaternary Vegetation of the Near East*. Beihefte zum Tübinger Atlas des Vorderen Orients, Reihe A (Naturwissenschaften) Nr. 18. Wiesbaden, Dr. Ludwig Reichert Verlag.
- Vaux, R.de. 1971 Palestine in the Early Bronze Age. In E.S. Edwards, C.J. Gadd and N.G.L. Hammond (eds.), *The Cambridge Ancient History Vol.1, Part. 2* (3rd edition), 208-237. Cambridge, Cambridge University. Pp..
- Weiss, D., B. Zissu and G. Solimany 2004 *Map of Nes Harim (104)*. Jerusalem, The Israel Antiquities Authority.
- Zohary, D. and M. Hopf 2000 *Domestication of Plants in the Old World: The Origin and Spread of Cultivated Plants in West Asia, Europa and the Nile Valley* (3rd edition). New York, Oxford University Press.
- 中野智章 1996 「エジプト第 1 王朝の王墓地比定に関する一試論—輸入土器からの視点—」『オリエント』第 39 巻第 1 号 19-40 頁。
- 山藤正敏 2007 「紀元前 4 千年紀後半期パレスティナ地域への文化流入—ナイル河下流域系土器の分析から—」『西アジア考古学』8 号 67-86 頁。

山藤 正敏

早稲田大学大学院文学研究科博士後期課程

Masatoshi YAMAFUJI

Waseda University